二〇二六年度（令和８年度）

横浜女学院中学校　E入学試験問題

令和８年２月３日（午後）

国　語

注　意

1　指示があるまで開けないでください。
2　問題は、27ページあります。
3　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4　時間は50分です。

受験番号	氏　名

一　次の文章の――線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違(まちが)いを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

夏休みの間に、①キョウリに帰った。なかなかいそがしくて行くことができなかったが、久しぶりに行っても祖父や祖母は喜んでむかえてくれた。自分が生まれたときからしばらく母親の実家で育ってきたと聞いて、不思議な感覚になった。②オサナいころに使っていた食器を見せてもらったが、こんなに自分は小さいものを使っていたのかと思った。とても暑い日が続いていたので、近くの市民プールに③トホで向かった。しかし、たどり着く前に頭がクラクラしてしまったので、少しベンチに座(すわ)って休んだ。④勇気を奮って、何とかプールに着いたので、すぐに水着になって水の中に飛びこんだ。プールサイドのコンクリートの上にはねた水が、あまりの暑さに状発してしまったようだ。

二　次の文章は宮島未奈『成瀬は信じた道をいく』の一節です。

主人公の「わたし」は、滋賀県大津市立ときめき小学校四年生の北川みらいです。みらいは夏祭りで財布をなくして困っていたところ、成瀬さんと島崎さんに助けてもらいました。その二人は、ゼゼカラという女子高生お笑いコンビで、地元の「膳所（ぜぜ）」という地名をもとにグループ名をつけ、有名になりました。問題文は、「ゼゼカラ」を応援するみらいが、クラスで各グループが取材したことを発表する「ときめきっ子タイム」の題材を、「ゼゼカラ」にしてもらい、グループの「結芽ちゃん（野原さん）」「たいちゃん」「くらっち」と一緒に発表の準備をしている場面からです。次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

週明けのときめきっ子タイムで、ゼゼカラから聞いた話をたいちゃんとくらっちに伝えた。成瀬さんは一度聞いた名前を忘れないこと、普段からおやつ昆布を食べていること、趣味でパトロールをしていること、何になるかより、何をやるかが重要であること。

一通り話を終えると、くらっちは「なにそれー」と笑って、たいちゃんは「興味深い」と考え込むような顔をした。

「成瀬さんの話ばっかりだけど、島崎さんはどんな人なの？」

たいちゃんが①痛いところをつく。成瀬さんのエピソードは事欠かないけれど、島崎さんには目立ったところがなさそうだった。

「島崎さんはわりと普通だよ。成瀬さんと同じマンションに住んでるんだって」

結芽ちゃんがわたしの知らなかった情報を教えてくれた。

「成瀬さんは赤い腕章をつけてパトロールしてるから、くらっちも会えるかもよ」

「俺はどうでもいいよ」

そんな言い方はないんじゃないかと思うけれど、何も言い返せない。

「写真も撮ったんだよね」

結芽ちゃんが話しかけてくれたので、わたしはプリントしてきた二人の写真を取り出した。ユニフォームを着た二人が空を指さしている。

「これだけネタがあれば発表もばっちりだね。北川さんも野原さんも、ありがとう」

たいちゃんに感謝されて、照れくさくなる。わたしの取材メモをもとに二人の紹介を模造紙にまとめ、だれがどのパートを発表するか話し合った。

その日の帰り、わたしはまっすぐ家に帰らず、膳所駅の方まで行ってみた。成瀬さんが月曜日はときめき坂をパトロールしていると言っていたからだ。だけど成瀬さんは見つからず、諦めて引き返すことにした。

すれ違った上級生のランドセルからリコーダーがはみ出ているのを見て、教室にリコーダーを忘れてきたことに気付く。今日の宿題はリコーダーの練習だったから、取ってきたほうがいい。

学校に戻って昇降口で靴を脱ごうとしたところで、「うちの班はみらいちゃんがゼゼカラにするって決めちゃったから

なー」と話す結芽ちゃんの声が聞こえた。②とたんに嫌な予感がたちこめてくる。わたしは脱いだ靴を持ち、隣の学年の下駄箱に急いで隠れた。

「夏祭りの司会の人だっけ？『膳所から世界へ！』って、本気で言ってるのかな」

この声は一組の璃央ちゃんだ。頭の中で「がーん」と大きな音が鳴った。

「結芽ちゃんもゼゼカラに会ってきたの？」

「うん、一人は普通の人で、一人は変わった人だったよ。一度聞いた人の名前は忘れないとか、趣味でパトロールしてるとか」

「やば」

「それと、乾いた昆布をバリバリ食べてた」

「昆布なんてそのまま食べる人いるの？」

二人の笑い声を聞いて、わたしは体中が熱くなっているのを感じた。足音を立てないように奥へと進み、二人が出ていくのを見送る。気付けば涙が顎を伝って床へと落ちていた。教室からリコーダーを取ってきて、学校を出る。

どうして結芽ちゃんはあんなことを言うんだろう。もしかしてわたしのことが嫌いなのかな。これまで仲良くしてくれていたのも嘘みたいに感じる。ゼゼカラを調べるのがいやなら直接言ってくれたらよかったのに。

Ⅰ、もしかしたら璃央ちゃんと話を合わせてああいうふうに言ったのかもしれない。あんまり好きじゃないキャラクターでも、友だちが持ってたら「かわいいね」って言うみたいな感じ。わたしが聞いてるって知ってたら、あんなこと言

わないだろう。

そんなふうに考えてもやっぱり気持ちは晴れなくて、うつむきながらときめき坂を下っていった。

「あれ、みらいちゃん？」

名前を呼ばれて顔を上げると、大津高校の制服を着た島崎さんがいた。ⓐ大津高校はときめき小のすぐ近くにある。これまでにも知らないうちにすれ違っていたのかもしれない。

「ええっ、どうしたの？　いじめられた？」

わたしの顔を見た島崎さんは、わかりやすくうろたえている。

「わたしでよければ話聞くけど」

何も言えないまま泣いているわたしを、島崎さんは「とりあえず公園でも行こうか」と誘ってくれた。ときめき坂を下り、馬場公園のベンチに並んで座る。

「みらいちゃんって西武があった頃のこと覚えてる？」

島崎さんは道の向かいの大きなマンションを見ながら尋ねた。西武大津店はマンションが建つ前にあったデパートで、四年前に閉店して取り壊された。

「覚えてます。五階のすべり台でよく遊んでました」

「あぁ、そっか。わたしが小さい頃にはまだすべり台なかったんだよ。あのコーナー、おままごとセットもあって楽しそうだったね」

島崎さんはカバンからポッキーを出して、「食べる？」とすすめてくれた。わたしは「いただきます」と言って一本もらう。チョコレートの甘さでぎゅっと固まっていた心が少し緩んだ気がした。

「ときめきっ子タイムの調べ学習は進んでる？」

さっき結芽ちゃんが言っていたことを思い出して、また涙があふれてくる。

「あぁっ、変なこと訊いてごめん。話したくなければ話さなくていいから」

「結芽ちゃんたちに、成瀬さんのことを馬鹿にされたんです」

わたしはさっきあったことを少しずつ話した。島崎さんは「そっか」と相槌を打ちながら聞いてくれる。

「みらいちゃんは本当に成瀬のこと好きでいてくれるんだね。わたしもうれしいよ」

島崎さんも悲しんだらどうしようと思っていたのに、なぜか喜ばれた。

「実際成瀬は変だし、結芽ちゃんが成瀬を変だって友だちに話すのも自然だと思うんだよね。別にそれはゼゼカラを選んだみらいちゃんのことが嫌いになったわけじゃないし、そういう意見の人もいるってことじゃないかな」

公園ではようちえんぐらいの子どもたちが笑い声を上げて駆け回っている。

「だけどまぁ、自分の好きな人とか物をけなされると嫌な気持ちになるのは間違いないね。気にしないようにするしかないのかも」

わたしはポケットからハンカチを出して、涙を拭いた。

「成瀬もみらいちゃんぐらいの頃には学校で嫌われてたんだよ」

「そうなんですか？」

島崎さんはうなずいて話を続ける。

「五年生のときなんて、クラスのみんなに無視されてたからね。どうしたってそういう時期はあるんだと思う」

成瀬さんは小さい頃から人気者だと思っていたから、意外だった。

「わたしもそのころは成瀬を避けてたんだよね。成瀬は強いから気にしてなかったみたいだけど、なかなかあんなふうにはなれないよね」

島崎さんはぽりぽり音を立てながらポッキーを食べる。

「あっ、噂をすれば」

公園の柵の向こうに腕章をつけた成瀬さんが見えた。島崎さんが「なるせー」と呼びかけて手を振ると、成瀬さんも気付いて公園に入ってくる。泣いていたことがバレないように、顔全体をハンカチで拭いた。

「発表の準備は順調か？」

わたしはとっさに「ばっちりです」と答えていた。結芽ちゃんは陰ではああ言っていたけれど、発表の準備には協力してくれている。

「それはよかった」

成瀬さんがうなずくのを見て、胸がちくっと痛くなる。

「二人はここで夏祭りの司会にスカウトされたんですよね？」

「そうだ。せっかくだからひとネタやろう」
島崎さんは「えぇ〜」と言いながらもどこかうれしそうに立ち上がった。二人はわたしに背を向けて一言二言交わしたあと、こっちに向き直る。
「膳所から世界へ！」
二人は同時に指先を空へと向ける。「膳所から世界へ！」をはじめて聞いたときの感動が、全身にぞわっと蘇るようだった。
「ゼゼカラです。よろしくお願いします」
二人が頭を下げると、わたしはたまらず拍手した。
「膳所っていえば、最近、西武大津店が閉店しましてね」
ボケの島崎さんが話し出す。
「最近ちゃうやろ！　四年前の話や！」
成瀬さんがいつもと様子の違う関西弁でツッコミを入れる。
「それで、わたしが新しくデパートを建てることにしたんですよ」
見たことのない漫才だった。島崎さんが「島崎百貨店」をびわ湖の上に建てるという筋書きで、おかしな設定が次々飛び出す。気付けばわたしは声を出して笑っていた。
「もうええわ！　ありがとうございました」

深くお辞儀する二人に拍手を送る。

「これはわたしたちが初めてM－1グランプリの予選に出たときのネタなの。冒頭はちょっと変えたけど」

「なんだかんだこのネタが一番思い出深いな」

④「二人がうらやましいです」

思ったことが口から出た。この先の人生、わたしはこんなふうに仲良くなれる誰かに出会えるだろうか。そう考えたら不安になってきて、また涙が出てきた。

「そうだな。わたしも島崎と会えたのは運が良かったと思っている」

「ほんと、たまたま同じマンションに住んでたんだもんね」

島崎さんがしみじみ言う。

「でも、わたしに言えるのは、先のことはわからないということだ。来年の今ごろ、北川にも心から信用できる友だちができているかもしれない」

成瀬さんは突然わたしの耳元に顔を近づけて、「わたしだって、島崎がいなくなるのが不安なんだ」と小声で言った。成瀬さんにも不安になることがあるなんて！

「なに？　内緒話？」

「たいしたことはない」

成瀬さんは「パトロールの続きに行ってくる」と公園を出ていった。

「わたしだって四年生のときには成瀬とこんなに仲良くなるなんて思ってなかったよ。もしかしたらみらいちゃんも意外な同級生と仲良くなるかもしれないし、全然別のところから親友が現れるかもしれない。そう考えたらちょっと楽しみじゃない？」

わたしはうなずいた。結芽ちゃんと璃央ちゃんが話していたことを思い出すとまだちくちく痛いけれど、島崎さんと会う前よりは気持ちが軽くなっている。

「もしいじめられたりしたら、成瀬でもわたしでも話してくれたらいいよ。わたしは力になれるかわからないけど、ひとりで抱え込むよりはいいと思うから」

また泣き出したわたしを、島崎さんは肩をなでて慰めてくれた。

「ゼゼカラは、ときめき地区に住む高校生二人のコンビです。もともと、M－1グランプリに出場するために組んだコンビでしたが、馬場公園で漫才の練習をしていたところをスカウトされて、ときめき夏祭りの司会をすることになりました。この写真は、『膳所から世界へ！』の決めポーズをしているところです」

クラスのみんながこっちを見ている。すごくドキドキしてるけど、ゼゼカラのことを知ってほしいから、大きな声ではっきりしゃべるように頑張った。

「成瀬あかりさんは膳所高校の三年生です。かるた班で、全国大会に出場したこともあります。校長室の前に飾られているミシガンの絵は成瀬さんが小学生のときに描いたものです。膳所駅の向こう側の国道沿いにある看板にも、成瀬さんの作っ

た交通安全標語が載(の)っています」

たいちゃんはすらすらとしゃべる。

「成瀬さんはおやつ昆布が好きで、一度聞いた人の名前を忘れないという特徴(とくちょう)があります。小学校の夏休みの課題は、絵も作文も書道も全部やってきたそうです」

くらっちが言うと、みんなが「えー」と驚(おどろ)く声が聞こえた。結芽ちゃんに目を向けると、緊張(きんちょう)でそれどころではないという顔をしている。

「成瀬さんはパトロールが趣味で、学校の帰りにときめき地区を回っています。振り込め詐欺(さぎ)を止めたり、救急車を呼んだりしたことがあるそうです。セーラー服に、赤い腕章が目印です。困ったことがあったら助けを求めましょう」

結芽ちゃんが早口で発表を終えて、⑤最後にわたしがもう一度口をひらく。

「島崎みゆきさんは大津高校の三年生です。一見ふつうの人ですが、漫才ではボケ役で、みんなを笑わせる面白い人です。わたしが泣いたときには慰めて、親切にしてくれました。優しいお姉さんみたいな存在です」

面白いエピソードは成瀬さんのほうが多いけれど、島崎さんあってこそのゼゼカラだ。二人を詳(くわ)しく調べることができて、わたしは満足していた。

「これで、ゼゼカラについての発表を終わります」

四人でお辞儀をすると、みんなが拍手をしてくれた。

「ゼゼカラの二人がどんな人なのか、よくわかりました」

先生からも好評で、ほっと胸をなでおろす。

「みらいちゃんのおかげで無事に終わってよかったー」

「結芽ちゃんが協力してくれたからうまくいったよ。ありがとう」

⑥結芽ちゃんはあの後も変わりなかった。本当はゼゼカラやわたしのことをよく思っていないのかもしれないが、好きになってほしいとお願いしてもしかたない。成瀬さんたちが言っていたみたいに先のことはわからないから、結芽ちゃんが成瀬さんを好きになることもあるかもしれないし、全然別のところで成瀬さんを好きな仲間が見つかるかもしれない。

「僕も今度成瀬さんを見かけたら話しかけてみよう」

たいちゃんの言葉に、わたしもうれしくなる。成瀬さんを好きな人もいれば、嫌いな人もいる。成瀬さんならどっちの人も助けるに決まってる。

（宮島未奈『成瀬は信じた道をいく』より）

155

問一　――線①「痛いところをつく」（6行目）の語句の説明として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　相手が立ち直れないほどの打撃（だげき）を与えること。

イ　急に思いついた自分の考えが気に入っていること。

ウ　あきれてしまって親しみの感情をなくしてしまうこと。

エ　本当の意味とは違う意味をふくめて発言して相手をからかうこと。

オ　弱点や不十分なことをはっきりと言い当てること。

問二　〜〜線ⓐ「が」（43行目）と**ちがう**用法で使われているものを次より1つ選び、記号で答えなさい。

ア　誰がこのコップを割ったのですか？

イ　すごい速さで走ってきた男が通り過ぎていった。

ウ　負けたというのですか？この私が。

エ　この町でもっとも有名な人、私が友、成瀬さんだ。

オ　京浜（けいひん）東北線と東急東横線が私の使っている路線だ。

問三　――線②「とたんに嫌な予感がたちこめてくる」（24行目）と「わたし」が思ったのはなぜですか。理由として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　リコーダーをさがしても、きっと誰かにかくされてしまって絶対に見つからないだろうと確信したから。

イ　親友の結芽ちゃんが他の子と帰っていて、自分とはもう一緒に帰ってくれなくなると思ってしまったから。

ウ　一組の璃央ちゃんはわたしがかくれていることを分かっていて、わざと結芽ちゃんに悪口を言わせようとしたから。

エ　結芽ちゃんの話す調子から、これから自分やゼゼカラに対する良くない話が始まると感じたから。

オ　結芽ちゃんはわたしがいることを分かっていて、わざと聞こえるようにわたしのせいでめんどくさいことになったと言ったから。

問四　［　I　］（38行目）に当てはまる最適な語を次より選び、記号で答えなさい。

ア　でも　　イ　だから　　ウ　なぜなら　　エ　また　　オ　だって

問五　――線③「ぎゅっと固まっていた心」（57行目）というのは、「わたし」がどういう状態になっていたということですか。次の空らんに当てはまる最適なか所を25字以内でぬき出し、最初の7字を答えなさい。

（　　）ことで、気持ちがこわばって心を開けなくなっていた状態

問六　――線④「二人がうらやましいです」（107行目）と言ったのは、「わたし」がどう思ったからですか。説明として**ふさわしくないもの**を次より1つ選び、記号で答えなさい。

ア　ゼゼカラの二人が楽しそうに漫才をしているのを見て、高校生になった自分が二人のような友人関係を築くことができるか不安になったから。

イ　ゼゼカラの二人が楽しそうに漫才をしているのを見て、自分には二人のように面白い話をする才能がないと思い、絶望したから。

ウ　ゼゼカラの二人が楽しそうに漫才をしているのを見て、自分の落ちこんでいる状態がよりはっきりと感じられ、さびしい気持ちがこみ上げてきたから。

エ　ゼゼカラの二人が楽しそうに漫才をしているのを見て、ずっと一緒に漫才をしてきた過去を思い浮かべ、今の私が感じているような友人関係の不安を、二人は経験していないと思ったから。

オ　ゼゼカラの二人が楽しそうに漫才をしているのを見て、M－1グランプリに出られるほど人気がある二人と一人ぼっちでいる自分を比べてしまい悲しくなったから。

問七　――線⑤「最後にわたしがもう一度口をひらく」（143行目）について、その後に「わたし」が発表した部分に注目をして、なぜ、この部分を「わたし」が発表したのですか。次の空らんに当てはまるように35字以内で書きなさい。

成瀬さんのエピソードはよく目立って面白いことが多いが、（　　）

問八　――線⑥「結芽ちゃんはあの後も変わりなかった」（154行目）ということに対して、「わたし」はどのように考えていますか。その説明として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　今回の発表で、結芽ちゃんのゼゼカラを苦手に思う気持ちを変えられなかったことから、他人の好みは変えることができないのだと考えている。

イ　結芽ちゃんとの関係を深めることはできないと感じ、これからはうわべだけ仲が良いふりをしていればいいと考えている。

ウ　結芽ちゃんの様子は、一組の璃央ちゃんに自分とゼゼカラの話をしていた時から変わっていないが、未来はどうなるか分からないと考えている。

エ　結芽ちゃんは照れ隠しで平然を装っていると気づき、その気持ちを尊重しようと考える一方で、いつかはゼゼカラを一緒に応援したいと考えている。

オ　結芽ちゃんのゼゼカラに対する発言を聞いた時から、もう友達として一緒に過ごすことはできないと感じ、距離（きょり）を置きたいと考えている。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。）

NUMO[※1]は2002年より地層処分[※2]の候補地となる自治体の公募を始めました。多くの自治体で検討してみようとする動きはあったのですが、いずれも応募するまでには至りませんでした。

そんななか、象徴的なできごとが起きました。2007年に高知県の東洋町の町長が独断で応募の手続きに入ったのです。町の幹部らと検討したうえで、住民へのきちんとした説明もなく応募の意向を示しました。過疎化が進み、地方交付税の大幅削減により財政難にあった東洋町は、地層処分に関する自治体への援助に期待したわけです。交付金は、地層処分の実現へ向けた第一段階の「文献調査」に対して2年間で最大20億円、次の「概要調査」では4年間で最大70億円の交付金が支給されることになっています。町長は東洋町にとってとても有り難いことだと判断したわけです。

I　これを受けて、町議会は町長への辞職勧告の決議を可決し、反対派の住民による町長のリコール決起集会が開催されるなどして、町長は辞職し出直し選挙の道を選びました。しかし、結果は反対派のリーダーが当選し、文献調査への応募は白紙撤回されました。これ以降、手をあげる自治体が皆無の状態が2020年の夏まで続きました。公募に応じたとしたら東洋町の二の舞になりかねないということで、どこの自治体の首長も公募に手をあげる気にはなれなかったのです。2020年の8月と9月に北海道の寿都町と神恵内村の首長が文献調査に手をあげ実施されることになりましたが、A と言うべきでしょう。

①こうした経緯があって、地層処分の第一段階である文献調査にすら応募する自治体もない状態が続き、ＮＵＭＯはお手上げ状態に陥ってしまいました。原子力委員会は何とかしなければならないということで、２０１０年に日本学術会議[※3]に対して「高レベル放射性廃棄物の処分に関する取組みについて」の審議依頼をおこないました。その内容は以下のようなものです。

(1)原子力発電から出る高レベル放射性廃棄物の処分に関する取り組みについての国民に対する説明や情報提供のあり方。

(2)地層処分場の候補地を全国公募する際、および応募の検討を開始した地域ないし国が調査の申し入れをした地域に対する説明や情報提供のあり方。

(3)ＮＵＭＯはこれらの実施に関してどのような役割を果たせばよいか。

要は、地層処分の使命を受けて設置されてから10年が経つにもかかわらず、ＮＵＭＯは地層処分の実現へ向けたはじめの一歩である文献調査すらできない状態でした。この状況を打開して国民の理解を得るにはどうすればよいかという依頼です。

この依頼を受けて日本学術会議では、２０１０年9月に課題別委員会「高レベル放射性廃棄物の処分に関する検討委員会」を設置して検討を開始しました。依頼内容を考慮して、委員会は人文・社会科学者および原子力発電技術の専門家を含む自然科学者からなる文理融合型の委員構成とすることになりました。委員の選定は、学術会議の幹事会（会長、3名の副会長、人文・社会科学、生命科学、理学・工学からなる三つの部の各部長、副部長、幹事で構成される重要な意思決定部会）によっ

てなされ、人文・社会科学4名、生命科学と理学・工学10名に加えて、人文・社会科学から2名の特任委員を追加して、計16名の委員会で始まりました。課題別委員会は幹事会が組織し人選をおこなうもので、部門、分野を超えたいわば学際的な委員会です。

筆者は1999年いらい、リスク社会論の研究に携わっていたこと、および学術会議で「日本の展望委員会・安全とリスク分科会」の幹事として「リスクに対応できる社会をめざして」の提言の取りまとめに参加したこと等の経歴により、幹事会で委員長に指名されました。理学・工学、生命科学の委員が3分の2を占める委員会で、どのように審議をして回答を取りまとめるか思案のしどころでしたが、環境社会学の専門家であり原発問題にも関与していた故舩橋晴俊氏を幹事として迎え、白熱した議論が展開されることになりました。

委員会で最初に確認された課題は、核のごみ問題について合意形成が非常に困難なのはどのような要因によるのか、合意形成の可能性を高めるためには、どのような条件が大切なのかを検討することでした。原子力政策に関する政策的判断、価値判断は国民全体や国会でなすべき問題ですが、そのための判断材料を科学的知見にもとづいて提供することが委員会のなすべきことだという認識です。そして、委員会の第三者性（利害関係者からの自律性と独立性）を維持するために、この委員会活動のあいだは、「［　B　］」ことを決めたのです。

審議を開始して半年ほど経過した2011年3月11日に、東日本大震災により福島第一原子力発電所の事故が起き、審議は一時中断を余儀なくされました。この事故により日本とくに東北・関東地方は騒然とした状態になったのです。原発の「安全神話」が崩壊して、国と原発を推進してきた電力事業者および科学者に対する信頼が失われました。委員会でも緊張

が走りましたが、期を改めて審議を再開することとし、同年11月に委員会を再度設置して、翌２０１２年の９月に結果をまとめ原子力委員会委員長に手交しました。

②核のごみ処分について国民の理解を得ることがなぜ困難なのでしょうか。その理由は日本の原子力発電を含めた大局的なエネルギー政策について、国民的な合意形成がなされていないことにあります。大局的なエネルギー政策についての国民的議論を経ないまま、なし崩し的に原子力発電の導入をおこなったことが問題です。こうした状況下で、核のごみの最終処分地選定への合意形成を求めるというのは［C］であり、手続きが逆転しています。エネルギー政策がきちんと国民的合意を得て、とくに原子力発電について合意を得たうえで核のごみの最終処分地選定をおこなうのが筋でしょう。原発を進めておいて、あとから廃棄物の処理を考えるというのは民主的なやり方ではありません。

ほんらい、核のごみ処分は原子力発電を開始した時点から同時並行しておこなうべき問題です。しかし、そのようにはならなかったのです。１９６６年に日本ではじめて茨城県東海村で原子力発電所が運転を開始しました。当時日本は高度経済成長のまっただなかにあり、電力需要がひっ迫[※4]していたため、発電量を増すための原発建設が優先され、核のごみのことは問題にされませんでした。問題にされるようになったのは、約35年後の２０００年にＮＵＭＯが設立されて以降なのです。

［Ⅱ］、核のごみ処分は短期の話ではなく、生活のごみ処理とは違って超長期の問題になります。核のごみは１万年から10万年の超長期間にわたって高レベルの放射線を出すのです。処分とはいえ、家庭のごみのように燃やしてしまったり、海に埋め立てたりするわけにはいきません。１万年から10万年のあいだに、地震や火山爆発など不測の事態が起きて、

万一、放射線が地上に運ばれてきたら大変なことになります。核のごみ処分は、こうしたリスクに常に注意し対応しなければならない困難を抱えているのです。

さらに、核のごみ処分に関しては、受益圏[※5]と受苦圏の分離が発生し、不公平な状況がもたらされます。この不公平な状況への対処として、電源三法交付金[※6]などの金銭的便益供与を政策手段とするのはもはや適切ではありません。かつて原子力発電所を誘致した自治体に多額の交付金が交付され、公民館などのハコモノ建設が進みましたが、必ずしも地域のためにならなかった反省もあります。

曲がりなりにも豊かな社会を実現した現在、国民のニーズは安全で安心できる持続可能な社会の実現にあります。多大なリスクを抱えた生活を望む地域はないはずであり、そうせざるをえないとすればそれは弱者へのしわ寄せとしてなされる場合です。核のごみの処分地を交付金目当てに引き受けることはもはや時代遅れの方策と言えるでしょう。

では、どのように議論を進めればよいのでしょうか。以下の三つが重要になります。

第一は、核のごみ処分のあり方に関する合意形成がなぜ困難なのかを分析したうえで、合意形成への道を探ることです。核のごみの処分問題をめぐるこれまでの政策枠組みは、２０００年に制定された「特定放射性廃棄物の最終処分に関する法律」いわゆる「最終処分法」にもとづいています。法の施行後、10年以上を経過しても、政策の実施を具体化できない状況が続きました。核のごみの地層処分について国民の理解が得られないのは、説明の仕方がまずいからであるとか、説得の技術が不十分だからであるといった問題ではありません。核のごみ処分に関する政策について抜本的な見直しが必要であり、

場合によっては従来の政策を白紙に戻して一から考え直す必要があることです。[1]

第二は、科学的知見の自律性[※7]の確保とその限界を自覚することです。安全性と危険性に関する自然科学的、工学的な再検討にあたっては、自律性のある科学者集団（認識共同体）による、専門的で独立性を備え、疑問や批判の提出に対して開かれた討論の場を確保しなければなりません。[2]

放射性廃棄物問題に対処するには科学的知識が不可欠の役割を果たすことは言うまでもありませんが、二重の意味で科学の限界が存在することを自覚することが必要です。第一に、利害調整や倫理的判断のように科学によっては原理的に答えられない問題が存在すること、第二に、原理的には科学が回答しうる問題であっても、その理論を実際に役立てるには様々な制約があること、です。

福島第一原発事故への対処過程で、多くの原子力発電の専門家はマスコミやジャーナリズムでその場しのぎのコメント③を繰り返し、国民の信頼感を大きく損ねました。こうしたなかで科学の専門家は科学の自律性と知識の限界を自覚することが必要なのです。[3]

第三は、国際的な視点を持つと同時に、日本固有の条件④を勘案[※8]することです。核のごみ処分問題については、原子力発電を実施してきた各国において、取り組みが進められています。各国は共通の問題に直面しているので、各国の動向を視野に入れることが有益です。加えて、日本の地殻・地層はきわめて不安定であり、地震大国であると同時に火山列島でもあります。活断層も数多く存在しています。これだけ不安定な地層状況を前提にして、核のごみを地層処分しなければならないとなると、大きなリスクを抱えることになります。日本の場合、核のごみの地層処分に際しては、自然現象の不確実性への特

段の配慮が求められるのです。 4

（今田高俊・寿楽浩太・中澤高師『核のごみをどうするか　もう一つの原発問題』より）

注1　NUMO…2000年の「最終処分法」で設立された、核のごみ処分を専門的に担当する組織。法律にもとづいて、原発を動かして核のごみを出してきた電力会社が共同してつくり、それを国が認める、政府の組織でもないが民間企業でもない特別な位置づけで作られている。原子力発電環境整備機構。

注2　地層処分…核のごみを最終処分する方法のひとつ。地下三〇〇メートル以上の深地層に安全確実に埋設する。

注3　日本学術会議…日本の人文・社会・自然科学全分野の科学者を代表する機関。

注4　ひっ迫…行きづまって余裕がなくなること。

注5　受益圏と受苦圏…この場合は、原子力発電の電力を使うことができるという利益を受けられる場所と、原子力発電所や核のごみを受け入れる所が実際に住んでいる地域の中にあってリスクを背負う場所のこと。

注6　電源三法交付金などの金銭的便益供与…1974年に制定された水力・地熱・原子力発電のある地域に発電所の利益が十分に与えられるように定めた三つの法律によって、支給される交付金を支払って与えること。

注7　自律性…自分自身で目標を立てて行動し、それに対して意義や価値を見出せること。内面的にひとり立ちをしている状態。

注8　勘案…物事を多くの角度からとらえて考え合わせること。

問一　Ⅰ（8行目）・Ⅱ（56行目）に当てはまる語の組み合わせとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅰ　そこで　Ⅱ　だから
イ　Ⅰ　このように　Ⅱ　そのうえ
ウ　Ⅰ　けれども　Ⅱ　したがって
エ　Ⅰ　ところが　Ⅱ　また
オ　Ⅰ　なぜなら　Ⅱ　さらに

問二　A（12行目）・C（50行目）に当てはまる最適な語を次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　日進月歩　イ　以心伝心　ウ　本末転倒（てんとう）　エ　付和雷同（ふわ）　オ　前途多難（ぜんと）

問三　――線①「こうした経緯」（14行目）とはどういうことですか。説明として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　高知県東洋町の町長が町議会により辞職勧告の決議が可決されたのは、町長が住民に対してきちんとした説明をせずに独断で応募しようとしたことへの非難の結果であり、自治体への補助金もおりなかったということ。

イ　高知県東洋町の町長が受け取ろうとした援助金はかなり高額であり、その交付金で財政難を乗り越えようとした意図は分かるが、町議会の辞職勧告が可決され、反対派の住民によるリコール決起集会が行われ批判されたということ。

ウ　高知県東洋町の町長が独断で核のごみ処分の候補地に名乗りを上げたことは確かに非難されることではあるが、辞職にまで至るのはあまりに行き過ぎた動きであり、出直し選挙で当選するべきであったという意見があったということ。

エ　高知県東洋町の町長が辞職して、さらに出直し選挙では核のごみの処分の候補地になることに反対したリーダーが新しい町長に当選したことは、ＮＵＭＯにとってはあまり歓迎（かんげい）できることではなかったということ。

オ　高知県東洋町の町長が自分だけの判断で核のごみ処分の候補地として名乗りを上げて応募しようとして、町議会の決議で辞職することになり白紙になって以来、名乗りを上げる自治体があまり現れなくなっているということ。

問四 B（41行目）に当てはまる最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 各委員は原子力推進機関からの研究費などは受け取らない

イ 各委員は国会議員からの研究助成金をもらわない

ウ 各委員は原子力発電の研究を原子力推進機関と協力して行う

エ 各委員は国民の価値判断材料を与えるために努力する

オ 各委員は文系や理系の分野を超えて研究をしない

問五 ――線②「核のごみ処分について国民の理解を得ることがなぜ困難なのでしょうか」（47行目）とありますが、困難であることの理由説明として**ふさわしくないもの**を次より1つ選び、記号で答えなさい。

ア 電力に余裕（ゆう）がなかった高度経済成長期に、国民的議論をしっかり行わずに原子力発電の導入が行われたから。

イ 核のごみ処分はとても長い時間を必要とし、焼却（しょうきゃく）や埋め立てをすることで解決する問題ではないから。

ウ 不安定な地層状況である日本は、核のごみの地層処分をすることで大きなリスクを抱えてしまうから。

エ 核のごみを受け入れることで支給される交付金の額が、リスクを負うにはあまりに低い額だから。

オ 原子力発電に対する合意を得られないまま、核廃棄物の最終処分地の選定が行われているから。

問六　――線③「その場しのぎのコメント」（82行目）とありますが、筆者は専門家には何が必要だと述べていますか。最適なか所を24字でぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問七　――線④「日本固有の条件」（85行目）とは、どういう条件ですか。60字以内で説明しなさい。

問八　本文には次の一文がぬけています。どの部分に入りますか。入る部分を探して、[1]（74行目）から[4]（90行目）の番号を書きなさい。

また、地層処分の政策が行き詰まっている原因については、現時点の科学的知見では超長期にわたる安全性と危険性の問題に対処しきれないリスクがあることを認識する必要があります。

問九　ある問題が起こった時に、リスクを抱える人と利益を受ける人が、不公平感をなるべく持たない形で解決するためにはどういうことが必要だと思いますか。あなたの考えを100字以内で書きなさい。